エステル記
エステル記は興奮と興味をかき立てるような書です
物語はバビロン捕囚から百年以上あとのことで
エズラ記やネヘミヤ記にあるようにエルサレムに帰ったユダヤ人たち
もいましたが帰らなかったユダヤ人も大勢い
ました エステル記は
古代ペルシャ帝国の主都スサで暮らしていたユダヤ人たちの物語
です おもな登場人物は二人のユダヤ人で
モルデカイとその従妹エステルです
それから酔っぱらいですぐ人の言いなりになるペルシャの王と
悪賢いペルシャの役人ハマンも登場します
この書は神について一度も触れていないという点で
非常に興味深いのですが読者としては
聖書は神についての書物ではないのかと
いぶかしく思うかもしれません 著者は不明ですがこの著者は巧
みな技法を使って随所に神のみわざとしるしがちり
ばめそれを探しながら読めるようになっています
エステル記には偶然に見える出来事と
皮肉な逆転が描かれていますがそれらは物語の背後で
神の計画とみわざが進められていることを示しているのです
それでは詳しく見ていきましょう 物語の冒頭で
ペルシャの王は合わせて 187 日にも及ぶ豪勢な宴会を 2 つ
催しています 宴会の目的は王の偉大さと荘厳
さを示すためでした 宴会の最終日にすっかり酔っ払った王は
王妃ワシュティに宴会の場に来て
自分の美しさを披露するようにと命じました
ところが彼女はそれを拒んだので王は酔ったまま
怒りに任せて彼女を王妃の位から退け
馬鹿げたことにペルシャの男たちを
一家の主として敬うようにという布告をしました
その後王は新しい王妃を探すために美女コンテストを開催しました
全く大がかりな茶番劇です しかしこの状況の中にエステル
とモルデカイが登場するのです エステルは自分がユダヤ人である
ことを伏せてコンテストに参加し
見事に勝ち抜きました 王はエステルに夢中になり彼女
を新しい王妃の位につけました その後モルデカイがまったく偶然

に二人の宦官が王の暗殺を企てている
のを聞きました モルデカイはそれをエステルに
伝えエステルが王に伝えたのでモルデカイは王の命を救った者
という栄誉を手に入れました このように最初のシーンから神
についての記述はないのに神の意図に沿って物事が進んでいる
ように思えます 神は何をしようとしているのでしょうか
続きを読んでみましょう 次のシーンではペルシャ人ではな
くアガグ人のハマンが登場します アガグ人である彼は第一サムエル
記 15 章からわかるようにカナン人の子孫です
王は彼を国で最高の地位につけたので
ハマンはすべての人を自分にひざまずかせようとしました
しかしモルデカイは彼にひざまずくのを拒んだため
ハマンは激怒しました そしてモルデカイがユダヤ人である
ことを知るとハマンは王を説得して
すべてのユダヤ人を虐殺するというとんでもない法令を制定したの
です ハマンは虐殺の日を決めるため
サイコロを投げました サイコロはヘブル語でプルと言います
このことについては後でまた触れ
ます 11 か月後のアダルの月の 13 日に
ユダヤ人はみな殺されることになりました
ハマンと王はこのひどい取り決めを祝って宴会を催しました
ここからユダヤ人にとって唯一
の希望であるモルデカイとエステルに焦点が
当てられます 二人はエステルが王に自分がユダヤ人
であることを明かしこの法令を取り消してもらうように
頼む計画を立てました しかしペルシャの法律では
王から呼ばれていないのに王のもとに出向くのは死に価すること
でした ここでモルデカイが鍵となる発言
をします もしエステルが沈黙を守ったとして
もユダヤ人のための助けはよそから
来るだろうとしながらだがあなたが王妃になったのは
この時のためかもしれないと言うのです
エステルはそれに応えて勇敢にも王のところに行く決心をし
驚くべき言葉を口にします 私は死ななければならないなら
死にます その後ハマンの邪悪な計画は
皮肉な成り行きによって覆されていきます

エステルはまず王とハマンを宴会に招き
次の日にもう一度 3 人だけの宴会を開いて
そこで 2 人に特別なお願いをしたいと言いました
ハマンは酔ってその場を去りましたが
途中でモルデカイを見かけました 彼を見て改めて腹を立てたハマン
は高い柱を立てさせ翌朝そこにモル
デカイをかけることにしました これはユダヤ人にとっても
モルデカイにとっても最悪の事態のように思えます
しかし突然状況は一変します ちょうどその日王は寝つけずにい
ました そこで王家の年代記を持ってこさせそれを朗読させました
そこにモルデカイが王の命を救ったことが書いてあったのです
王はそんなことはすっかり忘れていました
朝になってハマンがモルデカイの死刑の許可をもらおうと入ってきた時
王はハマンに王の命を救ったモルデカイに栄誉
を与えるようにと命じました それでハマンはモルデカイを王の
馬に乗せ彼を誉めたたえよと言いながら
街中を練り歩く羽目になったのです
この瞬間が物語全体の転換点となりました
ハマンは失脚への道をたどり始めモルデカイは力をつけていった
のですさてどうなっていくのでしょう
その日エステルの 2 回めの宴会に王とハマンがやってくると
エステルはまず自分がユダヤ人であることを告げ
次にハマンが彼女と王の命を救ったモルデカイと
すべてのユダヤ人を殺す法令を制定したことを告げました
この時王はたくさんお酒を飲んでいました
この話を聞くとまた酔った勢いで怒りに任せて
ハマンを彼がモルデカイのために建てた柱にかけるように命じました
何とも皮肉で残酷な結果です しかし
ハマンが死刑にされてもユダヤ人虐殺の法令はまだ生きています
ここでもう一度エステルとモルデカイに焦点が当てられます
2 人は法令を取り消してもらおうとしたのですが
王が一度制定した法令は誰も取り消せないことがわかりました
そこで王はモルデカイにそれに対抗する法令を作らせたのです
それはユダヤ人が殺されることになっているアダルの月の 13 日
にユダヤ人は身を守るために
自分たちを殺そうとする者たちを殺していいという法令です

モルデカイとエステルと国中のユダヤ人たちは
この新しい法令を喜んで祝宴を張り
モルデカイは王の重臣になりました ついにその日がやってくるとユダヤ人
たちは敵を打ち負かしました 彼らはまずハマンの一族を滅ぼし
次にハマンの計画に加わっていた ペルシャの役人たちを殺しました
次の日はユダヤ人を殺そうとしていた
すべてのペルシャ人を滅ぼして良いという許可が出ました
こうしてユダヤ人は全滅の危機から救われた
喜びに沸き上がったのです エステルとモルデカイは虐殺の
危機から救われたことを記念してプリムの祭りとして
祝宴を毎年 2 日間設けるという法令を出しました
これはハマンが投げたサイコロプルから取った名前です
物語はモルデカイが王の次の位につき偉大な者になったことと
捕囚だったユダヤ人が今や栄えていることを記して終わっています
ここで振り返ってこの物語がどのように構成されている
か見てみましょう 随所に皮肉な逆転の瞬間がありました
が物語全体も一つの大きな皮肉な
逆転でありその構成は緻密です冒頭の王の
栄誉と宴会と法令は最後のシーンのモルデカイの栄誉
と宴会と法令と対になっています エステルとモルデカイははじめに
王の命を救いましたが最後にはユダヤ人全員の命を救
いました 次にハマンの昇進と法令と宴会
はモルデカイの昇進法令宴会に取って変わられた
中盤ではエステルとモルデカイが計画を立てるシーンと
エステルの二つの宴会に囲まれるようにハマンが屈辱を味わい
モルデカイが称賛されるシーンが
物語の最大の逆転の場面として見事に配置されています
もう一つ興味深い点は登場人物たちの道徳的なあいまいさです
飲酒や怒りやセックスや殺人のシーンがありますが
モルデカイとエステルもその一部を担っているのです
また彼ら自身異邦人と結婚したりきよくない食べ物を食べたりと
トーラーに違反しています ですから物語はこの二人の行為
をすべて良しとして道徳的なお手本
としているわけではなく最悪の事態の中でも信頼と希望
を持ち続ける人として描いています ここで最初の疑問に戻ってくる
ことになります つまりエステル記はなぜ

神について一言もふれていないのでしょうか
この時代のイスラエルは捕囚になってトーラーを忠実に守っていなくて
神が不在なのではないかとも感じていました
そんなイスラエルと神は関係を断ち
ご自分の約束を打ち捨てるだろうと思えてきます
しかしこの書はそれをはっきり否定しているのです
エステル記は混乱に満ち人々の道徳心が曖昧になった世界の
中でも神はみわざを行いたとえ道徳的に
妥協しているところがあっても神に寄り頼む人なら用いられる
と示しています　神が働いているとわからない時
にも神の摂理を信頼し状況がどんなに悪くても神は必ず
この世界を贖ってくださるという希望を持ち続けるよう
私たちを促しているのです　これがエステル記です

500字要約
『エステル記』は古代ペルシャ帝国の主都スサに住むユダヤ人たちの物語で、主要な登場人物はモルデカイ、エステル、ペルシャの王、ハマンです。物語はバビロン捕囚から百年以上後に起こり、エステルとモルデカイが王の命を救うために奮闘します。物語は、王の豪勢な宴会、ワシュティ王妃の退位、美女コンテストでエステルが選ばれ、モルデカイが王の命を救う事件から始まります。ハマンの登場後、ハマンがユダヤ人虐殺の計画を立てると、エステルとモルデカイは法令を取り消すために奔走します。最終的に、エステルとモルデカイはユダヤ人を救い、ハマンは死に、モルデカイは王の重臣になります。
物語は皮肉な逆転と道徳的な曖昧さを含んでおり、神については直接触れられていませんが、神のみわざが物語の背後で進行していることが示唆されています。エステル記は信仰と希望を持ち続ける重要性を強調し、神の摂理に信頼することが重要であることを伝える物語です。